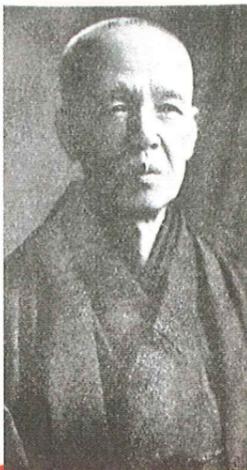


銀座十字屋創業の顛末

株式会社十字屋代表取締役社長

文／中村清郎

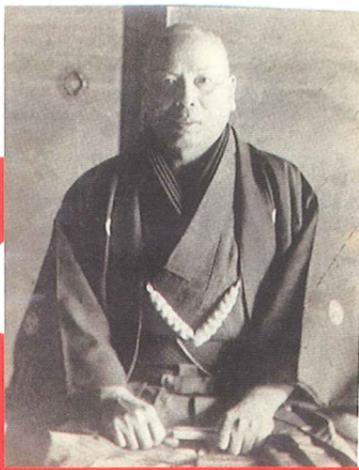
始



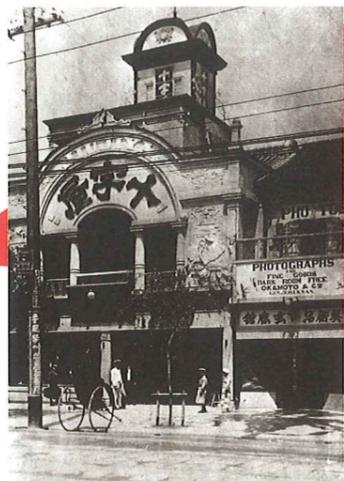
原胤昭の写真
日本で最初にクリスマスツリーを飾った人でも有名。原女学校の創始者でもある。



戸田欽堂の写真
紙腔琴を研究開発し十字屋の楽器取り扱いの基礎をつくった。



▲ 倉田 繁太郎の写真

▲ 倉田 繁太郎の妻 まさのの写真
原胤昭の弟子でクリスチャン

▲ 明治時代の十字屋ビル

太田愛人氏の著書「開示の築地、民権の銀座」に詳しくお書き頂いている。明治初期もつとも知的で誠実な人びとはキリスト教と自由民権に向った。外人居留地をもち、海外文化の窓口として栄えた築地と、そのとなり街、自由民権運動の拠点、銀座が生んだ四人が十字屋の開設に深く関与していた。その四人は次の通り。原胤昭（ハラタネアキ）、鈴木舍定（スズキイエサダ）、田村直臣（タムラナオオミ）、戸田欽堂（トダキンドウ）。四名とも米国長老派宣教師カローザスから明治十年洗礼を受けたが、明治七年に新しく出来た銀座レンガ街区の銀座三丁目に「十字屋書店」を創業。これが「銀座十字屋」の起源となりました。

何故、十字屋と命名したかは、ずばりキリスト教関係書籍、賛美歌を銀座通りで店頭展開出来ることになった為、自然と十字架から「十字屋」が誕生した。因みに、明治政府による耶蘇教解禁は明治六年でした。

原胤昭はカローザスの米国製の九尺に五尺の大机の脚をぬぎ、その上に耶蘇教書林十字屋と金色で大書して看板にしたところ、銀座三丁目西側の立地の為、朝日に輝き評判となっていた。ところが、原は警察に召喚され、大看板撤去を命じられた。理由は「人民の迷惑を考え、何か間違いがあつてはならぬ」ということであつた。

これに鈴木舍定が警察に出かけて激論をなし、いかなる事があつてもその命令には服従しないと頑張りぬいたと云われている。耶蘇教解禁が明治六年だけに、警察の方が過剰反応をしてしまったというのが真相だつた。決死の覚悟で信仰告白をした武士上がりの面々であるから、当時の役人の目など気にせず、とくに薩長の田舎侍上がりが官服を着て威張つて歩く姿に四人衆はこころよしとせず、その後の行動にもこの筋を通した。

一方、時期はこの時より若干遅れるが、もう一人十字屋の成り立ちに大きく貢献することになる倉田繁太郎（クラタシゲタロウ）が居る。能登出身の倉田は、東京に出てきて海軍兵学校に入ろうとしたが、視力が弱くはねられてしまった。彼は、これをはかなみ、意を決して皇居のお堀に身を投げた。併し漁師出身の身から泳ぎ始めたらしい。この騒ぎを近くに居た原胤昭が駆けつけ助け上げた。身元引き受け人となり身投げ人の事情を聞いて大変同情し、それなら私の所に来て働け、ということになったらしい。

倉田もいったん死を覚悟した身の上なので熱心に働き十字屋でも重宝にされるようになった。士族あがりの書生キリスト者達は二階に集つて議論ばかりしていて商売には不向きだったが、倉田が実務に当たるとなると、店の足元が固まることとなった。楽器店の始まりは横浜に帰国する外国人の払い下げ品の市場がありその中に、オルガンが含まれている為、原と倉田が出向き入手した。オルガンを大八車で引いて帰る途中、西川という指物店に出会った。そこでオルガンの修理や模造を出来ないかとの話になり、部品さえあれば出来そうだとこのことで、このオルガンは横浜の西川に預けられ吾国で初めてオルガン制作が進むこととなった。

一方戸田欽堂は米国留学の経験から後に「紙腔琴」と命名され売り出されたこのものの試作を続けていた。結局、紙腔琴は十字屋一手扱の商品となり明治末頃蓄音器が現われる迄息長く十字屋の楽器部門の礎をつくるべく商いに精出されていた。（次号に続く）

銀座十字屋創業の顛末

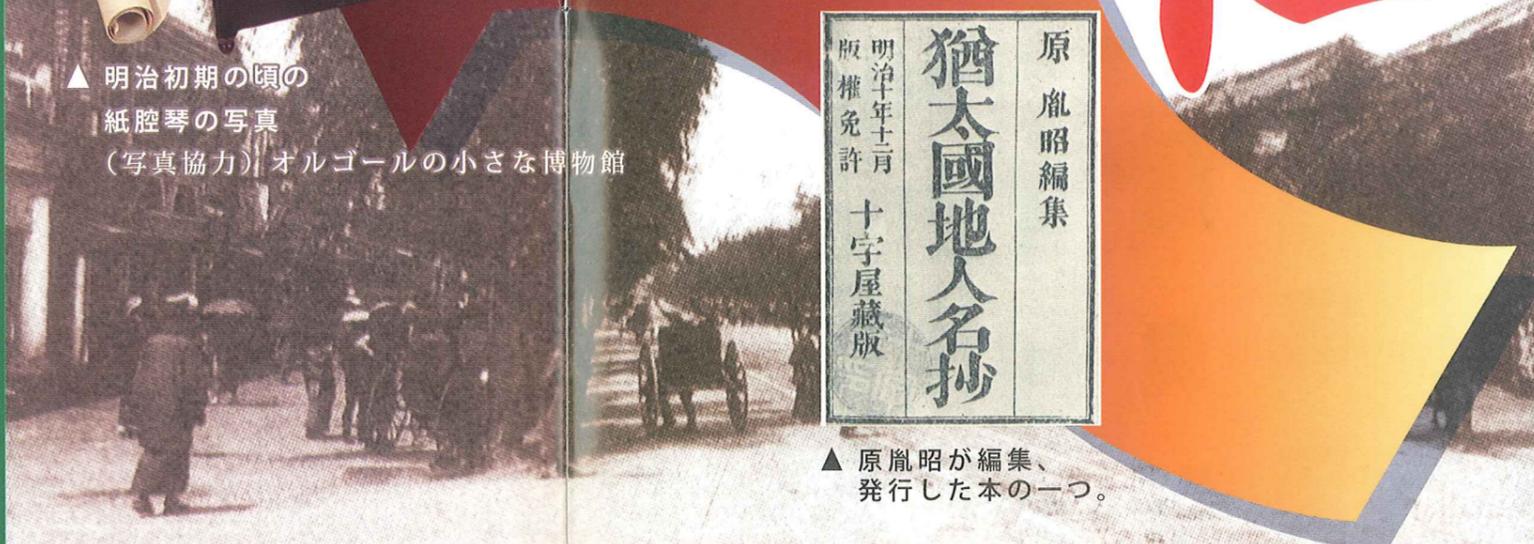
株式会社十字屋代表取締役社長

文／中村清郎

祖



▲ 明治初期の頃の紙腔琴の写真
(写真協力) オルゴールの小さな博物館



原胤昭編集
猶太國地人名抄
明治十年十月
版權免許
十字屋藏版

▲ 原胤昭が編集、発行した本の一つ。

戸田欽堂とだ きんどうは、明治初期の時代において、非常に珍しい環境で青春を謳歌していた。特筆すべきは、明治四年三月、知事であった父に同行して渡米、一年あまりを異国で過ごしたことである。元来の身分がお金に事欠かない家の出身であったため、カロリザスの門下生の中でもひととき異彩を放っていたようだ。当時外国へ行くということは、そう簡単なことではなかった。田村直臣（十字屋創業メンバーの一人）が牧師留学と称して渡米できたのは、明治十五年であったということを見ると、戸田の早い渡米は当時たいへん珍しがられた。その戸田も、渡米から二年後の明治七年にカロリザスから耶蘇教洗礼を受けた。

現代風に言えば、戸田はお坊ちゃまであったということだろう。しかし、商売の天才でもあった。九星堂なる唐物屋を開いていた。唐物屋といっても百貨店のような雑貨店、古着やガラスの墨汁、横文字本などを販売するお店で、開店当初から大変流行っていた。

そんな、盛況なお店の横に開店したのが、聞くも薄気味の悪い切支丹の本屋耶蘇教書肆十字屋であった。この創業に大きく貢献したのも戸田であった。創業の経緯は、原と戸田、カロリザスは当時米国のバィブル・ソサイティから来たルーミスに、耶蘇の本を売ってくれと頼まれたことに起因する。少し日本語の分かるカロリザスと、渡米経験のある戸田が手まね、物まね、身振りイェス、ノーと返答しているうちに、あれよあれよと決まったのだ。原は、教書を広く日本人の手に渡せば良いとばかりに、活動。戸田は全ての資金を拠出した。

戸田はその他に前号でも紹介した紙腔琴しきやうしんの開発で十字屋に大きな財産を残していった。今日の十字屋楽器店のルーツは戸田欽堂のこの紙腔琴に由来するといっても過言ではない。紙腔琴という発想自体が、銀座商店街のハイカラさを先取りした楽器であったとも言える。これが機縁で本屋の十字屋は今のような楽器屋専門になっていったのだ。

※参考文献 「開化の築地民権の銀座」(築地書館) 一九八九年



▲ 紙腔琴の中の裏側

▲ フリーリードのアップ
14穴のハーモニカが埋め込まれている

▲ 紙腔琴の動力であるハンドル。
これを回すことで音を奏でていた。

前回は、十字屋の基礎を築いたとされる紙腔琴の産みの親、戸田欽堂について語ってきた。今回はこの紙腔琴の機構についてもう少し詳しく紹介したい。

実際の機構の話の前に、紙腔琴は楽器として一体何に類するのか。意外に知られていないことなのだが、実はオルガンなのである。鍵盤のないオルガンはヨーロッパを中心に一八〇〇年代オルゴールとともに普及した代表的な楽器であった。持続音でハーモニーを楽しむオルガンと減衰音の繊細な音色を楽しむオルゴールは当時市民の間で大変な人気であった。さらに、楽器の演奏技術なしで音楽を楽しめる自動演奏楽器は、今のレコードやCD、MDといったものの原点であったと考えていただくと分かりやすい。

さて、紙腔琴のルーツを辿ってみると、その原点はアメリカにある。前号でも紹介した戸田は、日本人としては、いち早く父親の仕事の関係で渡米していた。当時（明治七年）アメリカでは自動演奏楽器オルガン二トが発売されており、持ち運びができ、しかも安価で多くのロールペーパー

の曲譜があつたため大変な人気を博していたようだ。渡米中の戸田も一度は目にして聴いていたことと容易に想像できる。一方、同じ時期、日本では宣教師たちが賛美歌の演奏をこのオルガン二トを使って奏していた。果たして戸田がこの場面を見て紙腔琴の製造に着手したかは定かではない。しかし、リードの数やロールペーパーを使った機構から想像するに、戸田はオルガン二トを参考にしていたことは間違いないであろう。ここに、日本初のメイド・イン・ジャパンによる自動演奏楽器「紙腔琴」が誕生したのである。

さて、いよいよ紙腔琴の機構であるが、どのような仕組みで音が奏でられるのか。紙腔琴は、和紙に孔を開けた巻紙を曲譜に使用し、フリーリード（ハーモニカの音源と同様）を音源としている。リードは十四穴が横一列に並んで配置されている。上図写真を見ていただくと箱の横にハンドルがある。このハンドルを回すと、上面にセットした巻紙がハンドルと同じ方向に送られる。それと同時に、ハンドルの回転力で箱の中のフィゴが上下して風袋に空気が送られる。そしてフリーリードには、ためられた空気が吹き込まれ、リードの上を巻紙が通過し、孔の

連載 VOL.3

銀座十字屋創業の顛末

文 / 故 中村清郎

部分がリードの上を通過すると、押さえのなくなったリードから音が鳴らされ、メロディが流れるという仕組みになっている。また、巻紙とリードの間から空気が漏れないよう、二本のローラーでしっかりと押さえられる機構になっている。

演奏方法はただハンドルを回すだけであり、誰でも音楽を奏することができ、また楽しめる装置（楽器）であった。この孔の刻み方によって奏する曲目が決まっていたので、孔の刻み方に工夫が必要でもあった。

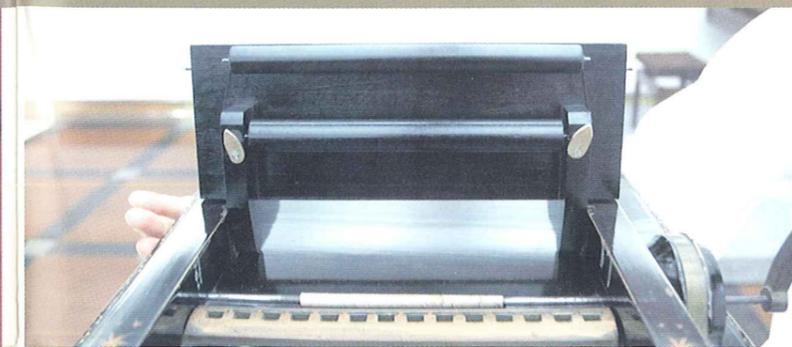
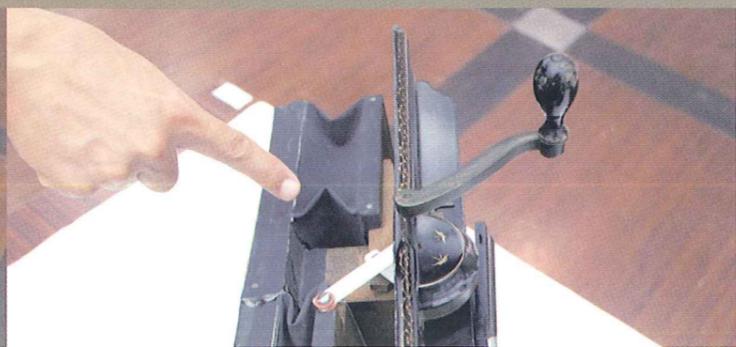
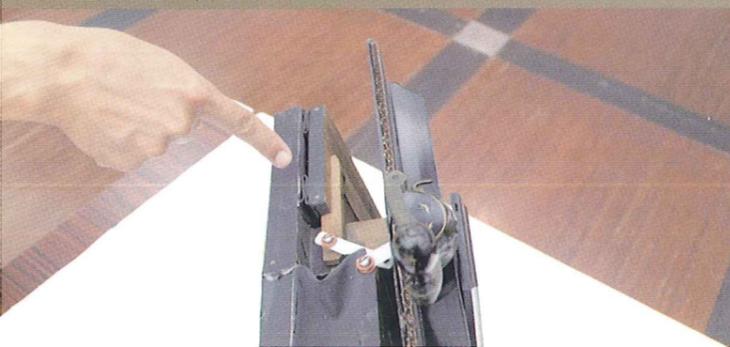
当時宣教師たちが使うために日本に持ち込まれたオルガン二トは、和音や伴奏が奏でられ素晴らしい演奏を行うことができたが、紙腔琴はメロディだけの単純な演奏しかできなかった。しかし、当時の日本では楽器がいなくても、自動で演奏する装置（楽器）は、少し大袈裟ではあるが驚異の楽器として記憶されたことであろうし、画期的な楽器として大変な人気を呼んだのである。

▼ 空気を送り出して、しぼんだ状態のフィゴ。

▼ ハンドルを回すとフィゴが上下し空気が送られる。

▼ 上下2本のローラーで巻紙をしっかりと押さえる。

▼ フィゴを横から見た写真



銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

十字屋とオルガンとの出会いについて、原胤昭はらたねあきと倉田繁太郎が横浜にて払い下げられたオルガンを引き取ったことを連載一号で紹介した。十字屋とオルガンとは、非常に親密な関係にある。いや、十字屋に留まらず、日本の西洋音楽の普及・発展に大きく貢献したのはオルガンと

いつても過言ではないだろう。オルガンが日本に入ってきたのは、一五八二年（天正十年）

二月二〇日にヴァリニャーノという宣教師が持ち込んだのが最初だとされている。いろいろな説があるため、定かではないが、あくまでもキリスト教の布教に伴う道具として日本に持ち込まれていた。しかし、一五八七年に突然豊臣秀吉は禁教令を發布。その後、政権が徳川家康に変わっても一六一四年に人心信仰を幕府に仕向けるため再度禁教令を發布し幕府による耶蘇教弾圧が

続いた。その間日本は鎖国となり外交は閉鎖され、日本から西洋音楽の灯は完全に消されていったのだ。それから、二五〇年もの月日が流れ、ペルー来航を機に開国。明治政府になり、明治六年ようやく耶蘇教解禁にいたったのだ。

この耶蘇教解禁から、多くの宣教師が二五〇年の月日を取り戻すかのように日本へ入国してくる。聖書片手に布教活動と想像してしまうが、彼らは必ず足踏みオルガンを携えて入国をしてきていた。キリスト教の布教において聖歌（賛美歌）は神を賛美し、信仰を補助するための大事な活動であり、その伴奏装置としてオルガンは欠かせなかったのだ。

原や倉田は、耶蘇教解禁より一年後の明治七年に開業した耶蘇教書肆十字屋を営んでいたので、教会や宣教師をよく訪れて

いたことは想像に難くない。この二人は、誰よりも早く舶来の楽器オルガンから奏でられる音色、それに合わせて歌われる聖歌を目の当たりにしていたことであろう。今までの日本にはない聴きなれない音階や音色。そして、正確に調律をされた楽器

を使用した音楽の存在。そして、普遍的な音の存在に、二人は新たな可能性とそのすばらしさを皆に伝えたいという純粋な気持ちが芽生えたのであろう。キリスト教とオルガン、ここに音楽の十字屋のルーツが垣間見える。

（株式会社十字屋 倉田恭伸）



▲ 明治時代の足踏みオルガン（西川製）

弊社所有のオルガン。明治・大正時代は、オルガンの横に販売店のプレートが貼られて販売しており、保証を含めて販売ルートが分かるようになっていた。

※参考文献

赤井励「オルガンの文化史」青弓社
太田愛人「開化の築地 民権の銀座」築地書館
女子パウロ会ホームページ

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

国産第一号のオルガンを製作したと言われている西川寅吉。今号は、西川寅吉と十字屋の関係を紐解いてみる。

西川寅吉は、千葉県出身で生まれた年代については諸説があり明確でない。生まれつき手先が器用であったことから、三味線職人として生計をたてていた。そんな彼の転機は明治九年頃訪れる。たまたま横浜で三味線の製造・修理を営んでいた西川であったが、当時の横浜は明治維新以後の文明開化真っ盛り。自然と舶来品を目にする機会や、三味線製造業ということもあってか、西洋楽器の修理品が持ち込まれることも多々あったことであろう。そんな中、たまたま持ち込まれたオルガンとの出会いが、その後の彼の人生を大きく変えることになる。

オルガンの複雑な機構、完成された音階。三味線職人である西川にとつて、この楽器に興味湧かないわけがなかった。職人気質は思い立ったらトコトーン！早速クラーク商会のイギリス人調律師クレンとドイツ人のカイロのもとで、三味線製造を続けながら調律技術やオルガンの勉強を重ねた。

クレンの元でさまざまなパイプオルガンの調律や調整を目の当たりにしてきた西川だが、独自の研究もこつこつと重ねていた。そして、オルガンとの出会いから七年後試行錯誤の末、リードオルガン製造の技術を習得したと言われている。それを見越してか明治十五年には三味線製造を廃業し、オルガン製造へ情熱を傾けはじめた。

幾度の失敗を繰り返しながら、

国産のリードオルガン試作に成功したのは明治十七年ごろであったと言われている。その翌年には、独立をして横浜の日ノ出町に西川風琴製造所という工場をかまえた。

この日ノ出町で、十字屋と西川寅吉は運命的な出会いを果たす。たまたま、横浜にて払い下げられたオルガンを西川寅吉に修理依頼したことがきっかけで十字屋の楽器取り扱いが始まったとされている。キリスト教会への出入りも多く、西洋音楽に触れる機会の多かった倉田繁太郎は、そのとき西川風琴の音色を聴いて何を思ったのであろうか。(次号に続く)

(株式会社十字屋 倉田恭伸)



明治時代の十字屋の新聞広告
明治初期の頃の新聞による広告。
和服姿の女性をモチーフにオルガンや紙腔琴を演奏する様子を表現していた。

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを

探る

明治二十年頃、西川オルガンの販売所として十字屋は盛んであった。その理由として、キリスト教会という販路を持つていたことが大きな要因といえる。

国内のオルガン市場は当時、ごく限られた富裕層と教会での需要しかなかった。当然、聖書を扱っていた十字屋が取り扱えば教会との接点が多く、販売機会の拡大は明らかであった。ただし、西川寅吉はただ単に良いオルガンを製造すればよし、とする思想は持っていなかった。

そもそもオルガン事業に踏み切ったいきさつは、外国製オルガンがあまりに高価であったことと、当時まだ開国間もない貧しい日本から貴重なお金が国外に流出してしまうことを危惧してとのことで製造を始めたとも言われている。この逸話からも、西川寅吉は単にオルガン製造に傾倒するだけでなく、オルガンビジネスの需要予測と日本国を思う事業家として確固たる

地位を築き始めたと言える。

明治二十四年頃、西川オルガンは、価格十八円の一号三十九鍵のベビーオルガンから七号六十一鍵の五十五円のオルガン、高級クラスでは十三号価格百円、そのほかに二百三十円の最高級機種まで各種ラインナップを取り揃えるまでにいった。西川オルガンは特にその品質の良さからキリスト教関係者への販売が多かったが、こと販売に関しては十字屋の役割も大きかったといえる。楽器とは、そもそも楽曲があつて始めてその価値を存分に発揮できる物である。十字屋は、聖書を扱う書肆（書店）であつたことで、海外からの楽譜なども多く取り扱うことができた。また、自らも日本語訳を施した聖書や賛美歌を出版していったことから、讚美歌集や牧師との共著によるオルガン教則本を次々と発行していった。教会への販路と楽譜などのソフトを有した十字屋が、西川オルガン

の販売を担うことで、明治中期から末期にかけてオルガンの普及とともに西洋音楽文化が浸透する礎となつていった。まさに西川オルガン隆盛の時代であつた。

時を同じくして、静岡県浜松市では、山葉寅楠がオルガン製造に成功し、独自の販路を構築

し日本への西洋音楽普及に努めていた。この山葉の出現と、西川オルガンの衰退、そして十字屋の呪縛については次号で紹介していく。

（株式会社十字屋 倉田恭伸）



▲ 教会へ納入したオルガン

大正時代～昭和初期に教会へ納入したオルガンの写真。

教会名やオルガンの機種は不明。